# ツナガリの世代意識

平成生まれの新世代＝デジタル・ネイティブが台頭してきている。生まれたときからインターネット環境が存在した彼らが持つ新しいツナガリの意識とは何か？　世代間におけるツ「ナガリ意識の隔たり」を踏まえ、融合の可能性を模索する。

04

IT起業家／ベンチャーキャピタリスト
情報技術研究者／ブロガー
デジタルハリウッド大学準教授
**橋本 大也**
DAIYA HASHIMOTO
1970年生まれ。早稲田大学在籍時代からITベンチャーを起業。ITビジネスのマーケティングと技術評価のコンサルタントとして、メディアやコミュニティで幅広く活動している。

**IT時代に台頭する新人類、「デジタルネイティブ」にみる人と人との新たなツナガリとは？**

「デジタルネイティブ」という言葉をご存知だろうか。これは、「子どものころから、インターネットやデジタル技術に囲まれ、それらを自明のものとして使いこなしてきた世代」のことを指す、アメリカの大手IT関連調査企業のピーター・ソンダーガード氏が名付けた名称である。対して、ITが普及する以前に生まれ、現在のIT環境に対応しようとしている世代は「デジタルイミグラント」と呼ばれている。

「国によってIT環境の普及状況に差があるので各国で異なりますが、日本においては、ちょうど今年二十歳を迎える平成元年世代がデジタルネイティブに該当すると私は考えています。彼らは、小学校1年生の時にウィンドウズ95が発表され、6年生の時にはi-モードが生まれた世代です。高校1年の時には、ミクシィ（mixi）が登場しました。『テクノロジーは、発明される前に生まれた人にのみテクノロジーとして意識される』という言葉があるんですが、デジタルネイティブ世代とは、ITをテクノロジーとは意識していない世代と言えますね」

こう語るのは、デジタルハリウッド大学において創立当初から教鞭を取り、まさにデジタルネイティブと呼ばれる世代と日々接している橋本大也氏。

「デジタルネイティブとイミグラントを比較した面白い話があるんです。『デジタルネイティブが世界を変える』という本の著者であるドン・タプスコットとその息子のエピソードなんですが、ある日、ハッブル望遠鏡の画像をインターネットで見られるサイトを息子と一緒に見ていたんだそうです。ドンは、インターネットを介して望遠鏡を通して写した火星の映像が見られるという事実、その技術の進歩に感動したのですが、息子はそうではなくて、『パパ、火星ってきれいだね』と言ったそうです。つまり、ネイティブ世代は技術の進歩などには関心を示さず、写っている対象の美しさにダイレクトに感動するということなんです。ネイティブとイミグラントの違いを端的に示したエピソードですね」

そんなネイティブ世代が抱く「人と人とのコミュニケーションのあり方」、「ツナガリの価値意識」には、いったいどんな特徴があるのだろうか。

「彼らがインターネットを介して行うコミュニケーションの大きな特徴は、文章やそのセンテンスが短いということです。学生たちのメールのやりとりを見ると、僕なんか『本当に理解してるのか!?』って感じてしまうぐらい（笑）。でも、驚くべきことに彼らにはちゃんとそこにあるニュアンスを読み取る能力がある。絵文字を使った短いやり取りだけで、何を言いたいのかがくみ取れているんですね」

橋本教授は生徒たちともさまざまなITツールを駆使して積極的にコミュニケーションをとられているよう。「生徒たちより僕の方がITオタクですよ」と笑う。

**どこまで「リアル」にこだわるか…IT時代の「ツナガリ」はどのように変化していくのか？**

イミグラントと呼ばれる世代の多くは、ヴァーチャルな環境におけるコミュニケーションの密度や濃度、そこで生じるつながりの希薄さについて、どうしても懸念してしまうもの。

「デジタルネイティブといっても、彼らも闇雲にインターネットを活用しているわけではありません。むしろ、必要な場合に必要なだけ使う能力に長けています。たとえば、彼らは必要な情報を検索エンジンから探すのではなく、ミクシィ上のコミュニティのように、同じ関心を持ったサークルの中から得る傾向にあります。つまり、インターネットの中にちゃんと社会があって、その関係性が現実社会ともつながっているんだと思います。ただし、これも私たちイミグラント世代から見た分析で、当のネイティブたちには、そこを分けて考える発想自体がないのだと思いますよ。

彼らだって必要であれば直接会う約束をして面と向かってコミュニケーションを行うことも辞さないわけですし、その必要がなければ、ネット上でのやり取りで何も問題もないと考えているわけです」

そんなネイティブ世代がどんどん社会に進出するこれからの時代。ネイティブとイミグラントの間に、これまでには見られなかった新しいコミュニケーションギャップなどが生じる可能性もあるのだろうか。

「これからの日本では、2000万人を超えた平成生まれ＝ネイティブ世代がイミグラント世代を支えるという社会構造がより鮮明になってきます。そこで重要になってくるのは、やはり双方の歩み寄りです。ネイティブとイミグラントでは、生きている情報空間に圧倒的な差があります。それをどう埋めるのか。今までは、イミグラント世代という括りの中における何らかの序列のもとに、コミュニケーションの流儀や伝統を教え込んでいくことで世代間の溝が埋まっていましたが、これからは、そう単純には行かないでしょうね。例えば、ネイティブ世代からのメールに時候の挨拶がないからといって、『失礼な奴だ』なんて思わないこと。彼らには、そこに対して何の悪気もない。ただ、デジタル上でのコミュニケーションに必要以上の格式は無駄だという判断を自然に下しているわけです。そうした感覚をどう理解していくかが、これからは本当に重要になってくると思いますね」

橋本氏は、イミグラント世代には「前向きな意味で『時代は変わる』という認識を持つことが必要」とも述べている。ネイティブとイミグラントがつながり合い、社会を支えあう、新しい時代の到来には、それを迎え入れるイミグラント世代の意識こそが大切になってきそうである。